

大浜上組惣代（滝村庄屋）。

鎌田組惣代（下宮村庄屋）。

六方組惣代（駄坂村庄屋）。

四人を和解者とした。

〔伝説〕 「萱原」

昔、今津の浦人が楽々浦入江の字萱原の地で、四ツ手網漁に来て盗猟するので、村人はときの代官に訴え出た。

呼び出された双方とも、それぞれ都合のよいことを主張し繰返すのみでなかなか解決がつかなかつた。或る日の裁判で、今津側は係争地を「貝穀…」といい、これに反し楽々浦側は「萱原…」と正しい地名をいつた。「かいがら」「かやばら」は呼び名が似ているが、正しい地名「萱原」を知る楽々浦側の主張を入れて勝訴と決定し、以後その場所の漁獵をかたく今津に禁じたそうである。

いい伝えによると、延宝元年（一六七三）四代徳川家綱代・初代京極伊勢守代という。前記古文書『曖済取替為一札之事』の争論から約百七十年前のことであった。

第五節 文化文政の時代

(1) 城崎にかんする刊行物など

江戸文化　十一代将軍家斉は、天明六年（一七八六）十五歳で將軍職につき、治世五十二年間の長期政権での最盛期であった。世はまさに天下泰平で榮華を極め、武士は太平に慣れ、百姓・町人ともに太平を称えた。その後に松平定信の寛政の改革と、水野忠邦の天保の改革があり、文化・文政はその中程にあたって庶民にかつてない文化的な気風が生れた。

「武士は人を治め、商人は治められる法なるに、今や町人が人を治める世の如し」といわれた。その文化の特色として、民衆の読み書きが普及して、狂歌・川柳・小説・俳諧・浮世絵版画・草双紙・文人画等が全盛をきわめた。

たとえば、円山派の応挙や呉春などの活躍もこの時代であつた。（香住町森の応挙寺）

また宿場の発達によつて都市と地方の交流が活発になるにしたがつて、名所や名産の紹介が盛んとなり、見物かたがた巡遊する人も多くなつて、地理案内が流行し、その手引の刊行も多くなつた。

諸国名所の発展期でもある。名所図絵のほとんど全部が十八世紀以来、「化政時代」にかけて刊行されている。また神詣りやおかげ詣りや巡礼の旅、神仏の御開帳も、たびたび行われるようになり、稻荷信仰は最も盛んとなり文政・天保では神とまで崇められた。

民衆の文化は極度に進み、「化政期」という特徴ある文化を育てたが、一方、「化政期は、燃えつきるローソクの最後に、ほっと光をあげるその瞬間であった」と、後世の史家はいう。

すなわち、北からロシア、南からイギリスが通商を求めて日本に迫り、日本近海はにわかに騒がしく、沿岸防備の強化に入ることとなり、文政八年（一八二五）に「異国船打払令」を出すまでに緊迫し、鎖国政策をしだいにゆさぶり始めた。とくに天保十一年（一八四〇）、中国でのアヘン戦争は、植民地化するあしがかりとなり、日本にも大きな影響を与えていた。しかし天保十三年（一八四二）にはゆえあってついに打払令を廃止した。三代家光からの鎖国断行後、二百年を経ていた。

ペリーの浦賀来航は、家斉死後十二年のことであつた。鎖国政策が解かれて、幕府もまた滅亡への道を急速にたどりはじめた。

化政期と城崎にかんする刊行物などはつぎのようになる。ここに『但州浴泉記』をはじめとする刊行物をその後列挙して、参考に供したい。まず化政期とその後の刊行物を記載しておこう。

- | | | |
|---------------|------|-------------|
| 一、『但州浴泉記』 | 伯邦 | 寛政十二年（一八〇〇） |
| 一、『筑紫紀行』十巻 | 吉田重房 | 享和二年（一八〇二） |
| 一、『但州湯嶋名勝志』 | 斎藤松陰 | 文化元年（一八〇四） |
| 一、『但州城崎湯治指南車』 | 倉谷安斎 | 文政三年（一八二〇） |
| 一、『半夜水明樓之記』 | 柴野栗山 | 文化四年（一八〇七） |
| 一、『但州城崎見聞図絵』 | | 文化七年（一八一〇） |

- 一、『旅行用心書』 同
- 一、『雨月物語』 つづらぶみ 上田秋成 文化九年（一八一二）
- 一、『温泉論』 四卷 栢植龍州 文化十三年（一八一六）
- 一、『但州城崎温泉寺觀音并湯之緣起』 文化十四年（一八一七） 朝鮮堂
- 一、『但馬城崎紀行』 台山納堂上人 文政五年（一八二三）
- 一、『柴野栗山連句碑』 関口源謙建之 天保四年（一八三三）
- 一、『浴泝風詠』 篠崎小竹 天保五年（一八三四）
- 一、『一見之碑』 加茂直兄 天保六年（一八三五）
- 一、『湯嶋道草』 道生庵主人源成章 天保九年（一八三八）
- 一、『但馬考』 桜井良翰 天保十二年（一八四二）
- 一、『但馬紀行』（温泉論） 新宮涼庭 弘化二年（一八四五）
- なお、化政期後のものにつぎの刊行がある。
- 一、『但遊草』 斎藤拙堂 安政三年（一八五六）
- 一、『但馬国新図』 赤木勝之 安政六年（一八五九） 木版刻
- 化政期以前のものはどうか。『浴場柄杓の由来』をはじめとしてつぎのような刊行物がある。
前のもの それらを列举するつぎのようになる。化政期以前とそれ以後とのありようをうかがうに参考となろう。

- 一、『浴場柄杓の由来』温泉寺十二世祐智 万治二年（一六五九）
- 一、『温泉雜藁』 釈 華梁 元禄十一年（一六九八）
- 一、『湯嶋記』 菊地武雅 宝永二年（一七〇五）
- 一、『但馬湯嶋道之記』 河合章堯 享保十八年（一七三三）
- 一、『一本堂薬選』四卷 香川修庵 享保十九年（一七三四）
- 一、『多治満古里』 仙石魯川（政辰） 宝暦七年（一七五七）
- 一、『但州城崎浴場の弁』
- 一、『但州湯嶋道中独案内』 四友享古道選 宝暦十三年（一七六三）
- 一、『城崎十景』 泉遊享扁額 明和四年（一七六七）
- 一、『但州城崎温泉論』 温泉寺祐淳記 安永三年（一七七四）



写87 但州湯嶋道中独案内（文芸館）

旅先そのものを楽しくするための、初心者向けの手引書ともいべき『道中細見』『道中独案内』『旅行用心集』の類が多数出版されて広く利用されるようになった。図会が出版された。

旅先そのものを楽しくするための、初心者向けの手引書ともいべき『道中細見』『道中独案内』『旅行用心集』の類が多数出版されて広く利用されるようになった。

ここに「但馬の湯」として広く照会され宣伝された湯嶋温泉は、京・大坂はもとより四国辺からも入湯浴客がしだいにその数を増し、それにともなって出版物も多くなつていった。

(2) 「おかげまいり」と「巡礼」

稻荷信仰 商業が盛んとなるにつれて利殖の追求がはげしくなり、その気持ちが福の神への信仰をとくに強めていった。

現世利益の中でも金銭財物への愛着から生れた信仰は、近世の一つの特徴と見てよいだろう。

この時代、稻荷神はもつとももてはやされた神の一つであった。京都伏見に鎮座する本社は、古くからこの地方であがめられていた。この農業神は、中世に仏教の荼枳尼天信仰と習合し、またキッネをそのお使いとするとの俗説も現れた。この信仰が育ち広められるには、稻荷行者たちの勧請旅行の力が大いにあつたことを見逃せない。

江戸に集まつた人々は、武家も町人も各戸を廻り屋敷神として勧請したので、また神棚と並べて縁起棚を設ける風習が盛んとなつた。これも福の神としての信仰によるものである。

但馬三大祭の一つとして名高い、出石の初午のにぎわいも、雄藩出石城下町の繁栄を映した行事である。わが町においても、四所神社の境内神の一つとして稻荷社があり、清玉（中の町）・弁天山・若上萬（駅前）・まんだら湯・城山（簸磯）・高松（結）等にまつられ、それぞれ信仰を集めている。化政期ののち、天保では、金毘羅・秋葉が流行神となつた。

世の太平がつづくと、人々の遠方の神社・仏閣にでむくことも流行した。とくに上方を中心とした熊野詣・大和巡幸・大社参り・金毘羅参り等、講を組んで出かけるようになった。

江戸時代、大ていの家には伊勢大神を祀った神棚があつた。神棚の奥には伊勢大神の御札が大事にはられ、毎月の一日・十五日には神棚を清め、御神酒・御供をしてまつる風習があつた。

伊勢大神のお札は、毎年暮の節季になると「大神宮様の御札配り」と称する者が、伊勢の御師の家から出て全国を配つて歩いた。この御札配りは、白袴をはき、黒木綿の紋付きを着て、唐草模様の風呂敷に包んだ御札箱を首からぶら下げ、街や村を廻つた。御師は内宮と外宮に分かれて師職をもつたが、延宝年間（一六七三～一六八〇）綱吉のころの記録によると、その総数四万家を数えた。

そして信者との間に親密な関係が保たれるようになつた。

参宮者は「伊勢道者」とも、単に「伊勢まいり」とも呼ばれた。それに同行衆といつて団体で参宮した。

宇治山田に着くと、まず御師の家にわらぢを脱いだが、ここが道者の宿坊となつた。御師はこれら地方から集まつてくる道者を、まとめて先導し参拝し神樂を奏上させ、また大麻やお祓い札を斡旋したのである。

“伊勢に七たび
愛宕あたごさまには月参り”

という俗諺さえあるほど民衆の伊勢信仰は大切なものであつた。

農村を中心、「伊勢講」がはやつた。毎月何文かの積立をして、それがたまつたら籤くじで選ばれた村の代表二、三人が、毎年あるいは隔年ごとに伊勢まいりに行つた。これを代参といった。

伊勢講

代参は村に戻ると、各戸に参宮の印(しるし)にお札を配ったのである。

代参が帰つてくるといふ日は、「坂迎え」「道迎」といつて、途中まで馬を連れて出迎え、道者を乗せて伊勢音頭も勇ましく村に練り込む、といふ風など広く行われて、「下向振舞」「どうぶるい」「どうむかへ」などといふ大番振舞がもよおされる所もあつて、伊勢参宮に対する熱中ぶりがよくうかがわれる。

江戸時代の「伊勢詣り」の風習は、今日でも村によりいろいろの形で残つてゐる。地方では「神明講」ともいふ。

講中は年数回、寄合をして、親睦をはかり代表を籤で決めて、参宮する路銀を積み立てた。経済力の乏しい村人により、慰安や休養とてない時代、交通も不便で徒步での長旅であった当時は、それこそ一代の大事件であり、水さかずきで別れを惜しみ道中の無事を祈つたとのいい伝えも事実であろう。

当地方では、伊勢神宮に代つて、いわゆる「元伊勢まいり」が盛んとなつてきた。地理的にも経済的な面からもまして交通事情の悪い時代、近いところが優先された。「元伊勢」とは、丹後大江町の「内宮」「外宮」である。

伊勢まいりは、講の中行事の一つで、村全戸で代参者を決定する親睦会であつたが、しだいに有志のみで行う形となり、参詣だけでなく京、大坂、大和巡り等を兼ねた観光的旅行化をしていつたところも多い。

大正元年（一九一二） 旧八月三日 結村

丹後元伊勢来記帳

この記録には、明治三十八年に新篭人名十八名が列記され、一人宛の年次代参者名がのせられている。

▽大正元年旧八月二日 秋森助太郎

記

一、酒 二升五合 代一円二十銭

一、酢 三合 代 五銭

一、じやこ 代 十銭

メ 一円三十五銭

一、一人前白米 七合宛

宿 肝入除く

一人二付キ 九銭当り

宿 宮下勘左衛門

▽大正六年

稻葉與一

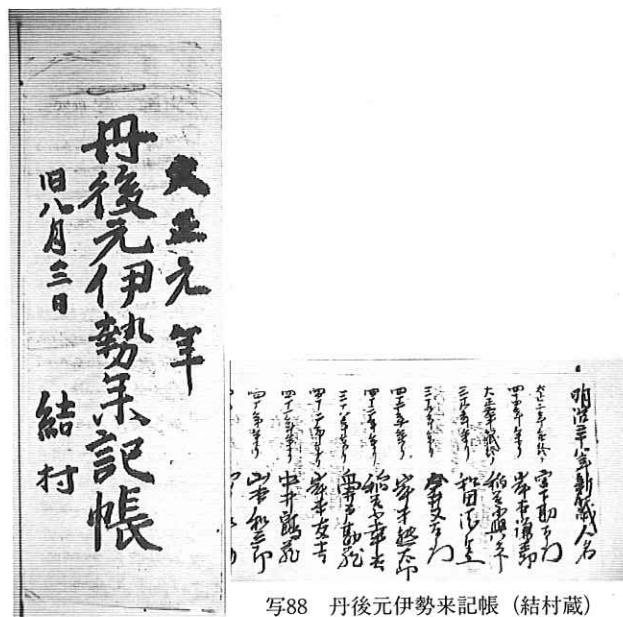
記

一、酒 三升 代一円六十八銭

一、酢 三合 代 六銭

一、むしじやこ 百目 代十六銭

メ 一円九十銭



写88 丹後元伊勢来記帳（結村蔵）

肝入除外 十五人割一人十三錢

宿 宮下久太郎

いまから七十年前の大正初期の村行事の一つ「伊勢まいり」の「どうむかへ」の状況を推察される史料として興味がある。

「一錢」が通用し、価値ある時代であった。

このころ結村の戸数は十九戸だから、「伊勢まいり」は、全部落民参加の行事であったことがわかる。

八月二日か三日に代参していることは、秋の収穫期前に実施して、台風の災を避けるためでもあったのだろう。

ついでに、このころの米価は一升（一・四錢）につき、左記の通りであった。

- 大正元年 二十一錢
- 大正五年 十四錢
- 大正十年 四十一錢
- 大正十四年 三十六錢

※大正七年（一九一八）八月三日、富山に米騒動がおこり、ついで一道三府三十二県に波及する。八月七日、白米小売一升五十錢を突破し、八月十四日、穀類収用法令公布される。

おかげまい
りと巡札 江戸中期以降になると「抜参り」、すなわち「おかげまいり」と呼ばれる集団の伊勢神宮参拝が流行した。

慶安三年（一六五〇）に大挙して伊勢まいりをするという風が流行つたが、以後、たいてい六十年を周期として訪れてくるおかげ年に伊勢参宮をすると、特別の御利益があるとだれとなくいい触らすものがあり、ついにそれが大流行となつたのである。

なかでも、天保元年（一八三〇）の「おかげまいり」は、おびただしい集団が神宮に集まつた。参宮街道は道者で身動きできないありさまで、山田奉行の報告書によると、閏三月一日の参拝者は二二八万人だったといふ。「おかげまいり」の実施前には、なにか決まって兆候が現れるという。大神宮のお札が降つてくる。米粒が降る大豆・小豆が降る、金銀・白羽の矢・馬の毛が降るとか、噂は口から口へと燎原の火のいく勢いで広がり、またたく間に四方に伝わつた。

それでおかげ年の利益にあづかるうと、各地方から老若男女がともども先を争つて、伊勢へ伊勢へと向つた。白衣に手甲・脚絆をつけ、金剛杖をついて道中する巡礼の姿は、江戸時代の名物となつて、有名な人形淨瑠璃「阿波の十郎兵衛」の一幕は、それを代表するものである。

巡礼とは何だろう。

そのことの本質を考えると難しいが、ただ巡礼という風習のあつた社会となかつた時代とがあつた。巡礼とは、僧職でない者が、日常生活から、離れてはるかに聖地靈場を訪うことである。ときには集団でゆく。その風習は中国や朝鮮にはなかつた。日本は儒教文明圏であつたからだという。

巡礼はインドにおいて古い伝統をもつてゐる。釈迦死後、ひとびとはその仏蹟を巡礼したし、バラモン教にもその風習がある。

日本では平安時代から室町時代いっぽいまでつづいた熊野詣の流行は、「蟻の熊野参り」ということばさえ生んだ。伊勢神宮への御蔭参りは、室町時代に始まったというし、また観音信仰は西国三十三カ所の巡礼になり、さらに、弘法大師信仰は四国八十八カ所の遍路というかたちになつて、いまだにつづいている。

「但馬觀音靈場めぐり」は、日高町進美寺の一番をふり出しに、温泉寺を三十三番の札納所としている。『但馬順礼之日記』は、いまにその記録が温泉寺にあるが、中世至徳年間（一三八四～一三八六）、温泉寺中興、清禪和尚が、西国三十三カ所順礼になぞられて但馬国内にも札所を定め給うとある。

その後、一時衰微したが、江戸初期、寛文のころ（一六六一～一六七二）助給という道人が、古の跡をたずねて觀音薩埵の遊地をかぞえ三十三カ所の札所を定めたが、天和三年（一六八三）法師祐全は、「法の友と順礼したが、札所の他に靈仏靈社のあるところ十九の靈地をとり合わせ、五十二の階級に表して、めぐる人々の利益のふかからんとするものなり……」と書いている。

法師祐全は十四世温泉寺法印で元禄三年（一六九〇）に寂した。

四国八十八カ所巡礼は全長三七八里（一四八六キロ）で、これを約五、六十日の間に巡礼し終るのが普通の日程であったという。

しかし、八十八カ所が確立したのは元禄ごろで、もつとも盛んに行われたのは文化・文政期であった。

この頃、西日本全体にわたり、「南無大師遍照金剛」と唱え、御詠歌をうたいながら通る善男善女の群で道中路がふさがつたとまで伝えられている。

温泉寺保存の『順礼帳』はつぎのように九冊におよぶ。

- 一、但馬三十三カ所順礼記録　元禄八年（一六九五）
一、但州大悲閣三十三カ所巡礼牒　宝永三年（一七〇六）
一、但州三十三カ所順礼人別記録　寛保三年（一七四三）
一、但州三十三カ所順礼人別記録　延享四年七月（一七四七）
一、　　同
一、但馬三十三カ所順礼日記　宝曆五年三月（一七五五）
一、　　同
一、但馬三十三カ所供養日記　明和八年（一七七一）
一、但馬三十三カ所順礼帳　明和

日本全国六十六カ国に、法華經一巻ずつ、合わせて六十六部を納めてまわるというのも現れ
六十六部　てきた。このころ社寺の天井や柱に「千社札」を貼って歩くことが流行した。これは、もとも
と参拝のしるしにじぶんの署名した札を奉納したものであるが、それが風習化するにつれて、興味本位的なも
のが急増したので、幕府は寛政十一年（一七九九・十一代家斉）禁止を命じたほどである。

いま、郷土に現存する廻国塔をあげればつぎのようになる。
(1) 薬師橋畔にあるもの。

納 日本廻国 供養塔

文政九年（一八二六）丙戌秋吉日

石工 藤木久五郎

当村住 山根氏一空良心

同行豊岡瓦師 善四郎

願主当村住 忠節貞心

施主豊岡瓦師 善四郎

(2) 来日岳八十八カ所、壱番札所石像と並んでいるものだが、磨滅して刻字がはつきりしない。

奉 大乘妙典 天下和順

納 日本廻国塔 □□□□□

文化七年（一八一〇）六月初

河内湊村 □□ 同行 □□□□

(3) 上山村中にあるもの。

天下太平

奉 大乗妙典

天保七年（一八三六）丙申

納 日本廻国塔

当邑願主

日月清明申秋大吉

田中惣右衛門

(4)福泉寺山門の大乗妙典

元禄十一年（一六九八）

(5)極楽寺山門には、宝筐塔に、先祖の供養の

ために造立したことを記すもの。

「大乗妙典拾細石上造塔 供養所集功德…」

明和八年（一七七一）

西村六左衛門之茂建立

(6)上山村中にあるもの。

大乗妙典 一字一石經塔

高さ二メル

永平寺六十八世慧昭袖書のもの。



写89 極楽寺門前の宝筐塔

(3) 四国山八十八カ所巡り

—（お大師山）—

巡礼のみち

ミニ四国八十八カ所巡礼のみちは、文化十一年（一八一四）に温泉寺実音と極樂寺仁州と中性院実雅により造成され、それ以後、信仰深い多くの賽者（村人・浴客等）によつてつぎつぎと石仏が建立されて今日にいたつてゐる。

その数二五〇余、時代とともに荒廃して、いまではその仏の姿や彫まれた文字さえ不明瞭となつてゐるものが多いが、この巡礼のみちは、いまや「自然歩道四国山ハイキングコース」として新しい時代の脚光を浴びて復活してきた。幽邃な広葉樹林、老松の間を小鳥の啼き声を聞きながら、来日岳をバックにして遠く日本海の海波や円山川・楽々浦・湾・城崎温泉街を眼下に美しい展望を楽しむ絶好のコースである。山道を上り下りして、二時間余りはかかる。

温泉寺多宝塔のそばにある札所石（二十一番・二十二番）から、弁天山麓の八十八番の打留大師か、愛宕社の「納札所」の石の大師像祠までは変化に富んだみちだ。またそのコースは「ミニ四国八十八カ所めぐり」のみちであるとともに、西国観音三十三カ所靈場のミニでもある。

自然の美とともに、変化のある山道、石仏の多種多様なのにまず興味をひかれながら何か人の心をなすませる、"ふるさとの道"であろう。

石仏信仰は、現代には無意味であろうか。

温泉寺中興といわれる清禅和尚は、中世の昔（至徳年間（一二八四））、『但馬西国觀音靈場三十三カ所』を



写90 温泉寺奥の院大師堂前庭の石仏群

創設し、その第三十三番の打留め札所を温泉寺と定められたことはすでに述べた。

西国三十三カ所靈場巡礼の由来は古く、御詠歌は一般庶民にあまねく普及した。人口に膾炙^{しゃしゃく}している。

巡礼の思想は洋の東西をとわぬ。日本には、印度・中国から渡つたもので、平安時代の山岳修驗道の山伏や真言・天台の密教の修行と結んで盛んとなつた。乱世においては道がふさがれ危険も多く、一時衰微したこともあった。その後、江戸時代には交通も便利となり、産業も発達し城下町・宿場町・寺内町・市場町・港町が形成され、文化も都鄙^{とひ}交流が繁くなるにしたがつて、人々の信仰心の高まりと旅をすることも自由となり、いわゆる「講」「結衆」「組」の形で団体の旅も盛んとなつた。そして化政期にはその絶頂に達した。

湯嶋の湯も近国的一般庶民に大いに利用されるようになつて、ますます繁栄した。

神社仏閣への寄進や数々の見聞旅行記の刊行を見ても理解できるであろう。

伊勢詣り・熊野詣り・金毘羅詣り・出雲まいり・各宗派の本山まいりなどとともに、各地寺社詣りが流行つた。四国の遍路もその一つといえる。

これが各地に巡礼や信仰の証^{あか}としての石仏・石碑・題目石・供養塔の造立

となり、ミニ靈場の巡礼のみちの造成とも結んだのであろう。そして、その遺跡・遺物が今日私たちの目に映るものであつて、「四国山八十八カ所巡り」のみちやその石仏群はそれにあたる。

城崎の巡礼のみちは、四所神社境内にある「札所石、第壱番、御本殿」を出発点とする。温泉寺に上り四国山の峰、尾根を歩いて城崎人が聖地としている弁天山を打留めとする形をとつてある。

この「みち」の開発や石仏の安置は、湯嶋・今津・桃嶋の郷人の尽力や協力と多くの湯治客の寄進によつて、いまから一六〇年ほど前に完成したものである。

これらの多くの石仏群や町石や札所石等、それをとり囲む自然の美とともにすべてを文化財として大切に保存したいものだ。

三十三の觀音功德や弘法大師の靈験を信じての巡礼遍路の旅は、人によつてそれぞれ目的や方法が違うのだろうが、苦行錬行・信仰と見学・リクリエーション等を兼ねての旅である。近時一つのブームとなつてきた。

石仏の信仰 巡礼遍路の証としていまに残つているところの「三界萬靈塔」「大乘妙典塔」「日本廻国六十六部塔」「南無阿彌陀仏」「南無妙法蓮華經塔」「南無大師遍照金剛碑」等の記念碑は、野の仏と同じく先祖の信仰深き人々の精神生活の一端を知る資料といえる。

人間の生活は時代とともに著しく変つてきただが、自然の中に根をおろし野ざらしとなつてゐるこれらの石仏は、幾百年を経た今日では、もはや人々の心から忘れられようとしている。

しかしこれらの石仏にも、ときどき供花や供物や賽錢がおいてある。それを見るととき、まだ人々の心をなごみ慰める力ともなつて現代に蘇つてゐることを感じる。

四国山一帯は、山陰海岸国立公園の一部であり、また保護林・水源涵養林・砂防指定区域として城崎温泉の共同財産区の一部であることを知らねばならぬ。

愛宕山は、温泉寺・極楽寺の茶室奥の院とともに展望台として知られている。ここに大きな石像大師像の祠があり、その基台に、「温泉寺へ三二町（三、三八〇メトル）、極楽寺へ一八町（一、九六〇メトル）、弁天山へ六町（六五〇メトル）」とかいてある。薬師橋から温泉寺まで四五〇メトルであるから、全コース七、八三〇メトルとなる。

これら多くの祖先が残したりっぱな文化財である、石仏群を礼拝しつつ、多忙な中、一日を解放されて探訪することはきわめて有意義なことであろう。

半ば崩壊した“みほとけ”に我々は現代を生きるよろこびを感じ、それを感謝したい。

一、八十八カ所靈場造立諸尊之趣意書

（正面）

伏シテ願ハクハ 国家安全・五穀成就・福

寿延長・菩提円満、且ツ山道ヲ作ル助力ハ
當鄉今津郷桃嶋郷、茅宇ヲ造立スルハ風雨
ヲ避ケンガ為メナリ。

六月一日始メテ山ニ入り、其ノ最高頂凡ソ二
里、ソノ行路凡ソ八里、荆棘ヲ伐リ株石ヲ
窄チ適々二十日ナラズシテ 其ノ道坦坦ナ



写91 愛宕山の弘法大師像

リ

若干ノ尊像ハ信男信女之ヲ安置シ一月ヲ過ギズシテ費用大イニ足ル
 彫刻既ニ畢リ 造営モマタ成シ終ル為メニ諸老宿 志ヲ遂ゲ 今供養ヲ了シ曰ク略記ス。
 則チ 平等利益ノ法界ニ至ル。

(東側面)

文化十一年甲戌三月良辰

但州城崎郡湯嶋村

温泉寺 現住 実音

極楽寺 現住 紹如(仁州)

中性院 現住 実雅

此ノ尊像ハ山上諸佛ノ賽資ヲ以テ奉造ノ者ナリ。

(西側面)

爰に居士あり嘗て、此地ニ四国八十八箇所の靈場をうつし衆生結縁の端となさんと欲す。志願年あり。一日居士寺に入り主宰と語り之に及ぶ 主宰之を諾す、また其の友三五輩と相談し、温泉寺上人に報ず、上人曰く、善なるかな、善なるかなと。六月に始め九月に終る、主人予室日に告げ隨喜余りあり 即ち合掌し讃歎して曰く、

「道ヲ開キ堂ヲ當ミ化縁ニ帰ス

功勲永ク界三千ニ施ス 観音ハ汝ノ信心ノ力ニ在リ 笑フナカレ山僧喜全ヲ勧ム』

万年山 杜多

仁州 八十八歳 敬叟

(南裏面)

世話人

土岐太平副軌 藤野作治雅珍

石見屋八左衛門 竹野屋太藏

伏見屋利助

伏見屋利助

吉野屋利吉

浜田屋友四郎 橋本屋喜衛門

橋本屋喜衛門

鍵屋彦三郎

彫刻 出石 浅田喜七

天野六兵衛

惣石工 丹後久美浜 利助

庄蔵

極楽寺の仁州と
温泉寺の実音
紹如ともいい、文化十一年

仁州和尚は、極楽寺十代で

三月、温泉寺、実音と協力して四国八十八カ所
靈場をひらき石仏群を置く。仁州和尚は文化十
四年（一八一七）十月寂八十八歳。極楽寺に
仁州の筆墨がある。「放下着」一軸。「水流元入
海」一軸。



写92 極楽寺仁州の墓

極樂寺の裏に墓がある。その銘に、

前徳禪仁州寿公座元禪師

師の諱は紹寿、字は仁州、本州朝来郡竹田に生れ、歳十三にして俊嶺最公に授け剃髪し、法を一道尊和尚に嗣ぐ、徳禪位師に転じ、素より道学辛勤、遊方して武州の長徳寺に掛錫し、通玄和尚に謁し、己事を参究して後、当院に住すること十五年、牧牛庵を結び屏居二十七年、然して一日と雖ども解げなく荒なく叢規を違はず頗る古人の風有り 寛政八年（一七九六）丙辰秋七月、毘盧を受得し □戒、法を開く帰依の徒、法諱を受ける者、凡そ三千余人。文化十四年丁丑十月某日緻疾二十四日辭世を書す。

銘に曰く

法臘七十五 世寿八十七

偈に曰く

八十有七 仁者の寿

「八十七歳 喫飯喫茶

道風全く之を仰いで以つて傳う

後世に永く万年を鎮む

金嶺叟 撰書

前大徳 宗鏡



写93 実音の墓

実音法師は、温泉寺第二十世の法印で、寛政十年（一七九八）から文政元年（一八一八）で在位二十年であつた。中性院（温泉寺末、維新後廃寺となる）の実雅、極楽寺の仁州とともに、四国山巡礼みちを開き、石仏を安置して信仰をひろめる。

文政元年戊寅六月二十五日に寂した。ときに五十六歳であった。

文化十二年（一八一五）には道智上人像および薬師如来像を安置している。墓は温泉寺墓地にある。五輪塔婆型、碑背に辞世を刻す。“雲はれて 心くもらぬ月影は、絶ず□□□のそらにこそすむ”

つぎに極楽寺茶室とその関係文化財を列挙しておこう。

一、創建の沿革

文化十一年（一八一四）四国山八十八カ所巡り創設の際に建てられたものと考えられる。

極楽寺住職は十代仁州和尚（文化十四年寂）である。創建時は、小堂宇のみであったが、

▽大正十二年十月 本堂および庫裡を新築した。

▽昭和二十五年 檀信徒の淨財により電燈敷度。

▽昭和三十九年 水道敷設。

▽昭和四十一年 保育所旧園舎の一棟を用いて庫裡を新築。

二、本尊

觀世音菩薩および弘法大師

三、使用状況

(イ) 每月二十日、二十一日（冬期は除く）および、春秋彼岸一週間、大師講員によりお籠りがなされてい
る。御参詣・投宿を歓迎する。

(ロ)

一般的の使用は、極楽寺に申込みください。使用料はとくに定めておりません。

投宿用具は揃つております。

四、建物 平屋建

○大師像線刻

○弘法大師巡礼姿 大正十四年三月

大師講女十三人

○石灯籠 大正四年八月

谷垣 こま

（温泉寺茶堂に一基）

○宝篋印塔

為山中栄昌

南無大師遍照金剛

奉誦詠日課

金剛經

舟屋玄淨

同

山口屋是誰



写94 札所石（四所神社）

普門品 竹野屋大蔵

般若心經 石見屋八左衛門

利吉

忠五郎

喜右衛門

文政三庚辰歲三月吉日（一八二〇）

四国山八十八カ所めぐりは、四所神社から出発するとすでに述べた。四所神社本殿の横につぎのような石柱がある。高さ一メートル、幅四〇センチ、厚さ三〇センチ、余りの石造物であつて、上に弘法大師の陽刻が龕造形につくられ、その下につぎのようにみえる。

第一番 御本殿

札所

第二番 若宮殿

第三番 天満殿

その側面には、つぎのように記されている。

文化十一年甲戌吉祥

温泉寺 現住 寂音

是より 極楽寺へ

四、五、六番は（極楽寺）いま、所在不明。

七、八、九番は（西山公園）へ。

このような札所石は、巡礼みちの「道しるべ」であり、参拝場所でもある。ついで、薬師橋畔の札所石がある。

第十番 地蔵堂

第十一番 行者堂 是より薬師堂へ。

第十二番 行者山

ついで、灯ろうの並ぶ参道を進み、二王門に達すると、小さく半ば埋もれて札所石がある。

第十三番 薬師庵

第十四番 薬師堂 是より中性院へ。

第十五番 阿弥陀堂

中性院とはどこだろう。

もと、寺山にあった一寺であるが、温泉寺椎樹の参道をのぼること一〇〇メル、路傍に「一町石」が建っている。この「寺山」にあったといわれている。

中性院に第十六番

第十七番

温泉寺の鐘楼わきにはつぎの札所石がある。

第十八番 觀音堂

第十九番 温泉寺 是より多宝塔へ。

第二十番 観喜天堂

観喜天堂は現在、薬師堂の横に移っている。

多宝塔に達すると正面左につきの札所石がある。

第二十一番 大日如来

第二十二番 七社明神

文化十一年甲戌吉祥
温泉寺現住 寒音

中性院墓地にあるのは二十三番から二十六番である。

二十三番 地藏堂

二十四番 (いまはなし)

二十五番 虚無藏

二十六番 是より山道。

これで、札所石は終り巡礼みちは山道にかかり、奥の院へ登っていく。

四所神社の本殿札所石に「是より極楽寺へ」とあるから、極楽寺へ行く順序であるが、いま、同寺にその所在がわからぬ。「独鉛水」辺から、右へ金毘羅山への参道に石仏が多いところから、当然西山公園から西谷不動への道々にあつたであろう。



写95 第二十一番札所石（温泉寺）

第四、五、六、七、八、九番が欠けて、薬師橋の「地蔵堂」にいたることとなつてゐる。

奥の院 往古より一宇あり千手觀音をまつる。延徳年間室町時代（四八〇年前）廢絶していたが、江戸『大師堂』 時代文化十一年（一八一四）に一帯の山にミニ八十八カ所靈場をひらき、途中二カ所に堂を建てた。その一つはこの大師堂でいま一つは極楽寺奥の院である。

堂の前に巨松があり「灯明松」とい大師影向のときは、光明赫灼としてこの樹上に点ずとの伝説があつたが、昭和四十三年冬突如倒壊して私達の眼前から姿を消して以来二十年を経た。大師堂本尊は、弘法大師作ともいわれる。堂の旧名「甘露峰列仙閣」と称す。

額は極楽寺、仁州和尚の筆である。

大正四年五月二十八日 再建

大正十三年十二月二十一日 内陣仏間一宇増築

昭和九年九月二十日 大師講中の手により増築修理された。

（別掲 記念碑銘）

日生下 民二郎

大 泉 ちか

日下部 藤太郎

河 村 いせ

者ハ年ト共ニ増加シ甚ダ不便ニ感ズルニ
此ノ大師堂ハ温泉寺ノ奥ノ院ニシテ古ヨ
リ存セシガ霜月ト共ニ破損ス然ルニ參詣

温泉寺奥の院

「大師堂」記念碑銘

多 根 しづ

至レリ

此ニ於イテ信者相集リ大師講中ヲ組織シ
此カ復興ヲ念ジ 春海節詠歌ヲ修得シ當
町並ニ近村ヲ巡礼シテ喜捨ヲ受ケ其ノ淨
財ヲ以テ堂ノ増築修理ヲ成セリ 尔來保
存管理一切ヲ引受ケ今ニ至ル

依テ永久ニ紀念スペク之ノ碑ヲ建ツ
昭和九年九月二十日

大師講中

昭和三十八年五月三日 ロープウェイ山上駅の開設により、その位置を現在地に移す。

中性院・温泉寺記録に、「右両院の儀、温泉寺末寺なり。然るに天明八申年（一七八八）十一月、本山
福聖院より末寺巡見のため、正智院役者金剛院御超^{ニシ}の砌り、仰せには当山の中性院、福聖院共、正智
院様末寺の由仰せられ候。当住祐洲□に是迄両院共當寺末寺に候、其の故は、是迄両院共に高野山の縋日
に登山仕らざず候故に當寺境内に院室を置き并せて當寺檀中に寺役引連れ参り其の助成を以て立行き候両
院なり。

御帰山の上、記録を御吟味成さるべく候、若し直末候はば、両院共に院地は當寺境内に候はば、右両院
は何れなりとも御引取なされ候：（中略）

小柳もと

西山とし
河尻かめ
結城よね

日生下よね
樋口かつ
中井たつ

山本しづ

其の後、寛政十年（一七九八）春二月に、当寺祐洲本寺御召付け高野山登り仕候。次年に本寺院様迄□仰の候はば、其の方、中性院、福聖院の儀は、其の方の末寺と相見え、此の方の記録相見えずと仰せの旨の由、祐洲申し伝え拙僧入院の後、之を記す。

「干時 寛政十午年 秋八月

廿世 実音代」

この記録によれば、天明八年（一七八八）、本山から巡見の節、中性院は高野山正智院末寺であると仰せられた。その後十年ばかりあとになつて高野山記録によれば、中性院・福聖院という末寺は本山にはないことがわかつたとある。

すなわち、十代家治の頃にこの二寺が温泉寺・寺山にあつたことがわかる。

中性院については、現温泉寺歴代法印墓地の下に中性院の墓地があり、印塔・五輪塔卵塔婆が多く苔むしている。

八十八カ所めぐりの展望所となつてゐる愛宕山頂にある「愛宕神社」の棟札が現存している。

金輪聖王天長地久国土安寧

奉再營 愛宕山大権現堂一字

文化十一甲戌年

夏六月 吉祥

別當温泉寺 住持 実音 義通

弟子	慶誦	日洋
同	純淨	淨邪
中性院	住持	実雅
弟子	智栄	
重仕書候		
庄屋	大津屋七右衛門	
年寄	舟屋庄右衛門	
年寄	宮ノ下市左衛門	
百姓代	油筒屋六左衛門	
大正四年	(来日山八十八ヶ所大師めぐり)	が造設され、觀音寺境内にその所以をかいた記念碑
起シ	竣ヲ九月ニツグ	能ク 大師ノ本誓願ニ副フベシ
大師	円寂ニ臨ミ誓ヒテ曰ク	儂シ人有リテ 我ガ像ヲ觀我カ名ヲ稱ヘ一礼一拝セバ
		龍華ノ會ニ必ズ俱モ
		「繫徳維昭」 「いしぶみ
		がある。



写96 中性院墓地

二世尊ト成佛ス 每ニ自ラ是ヲ作シ之ヲ念ズレバ 悲願何ヲカ擇パン
 而シテ 青年會員 道路ヲ開鑿シ 靈像ヲ安置セルハ 一切衆生ヲシテ悉ク
 身ヲ成就セシメント欲スルナリ 即チ或ハ他身ニ示シ或ハ己ノ事ヲ示スハ
 岩佛寿に非ザレバ 長遠ニ倍上数ヘンヤ

銘ヲ請ノ銘ニ曰ク

欲相見伊人

春山霞敬綺

慈恩悲願恩

寒碧用無痕

大正四年三月

伊豆修善寺現董

潤宗漂篆

但馬永源現住

芳惟安撰

尾張龍泉現住

潤球学書

背面

發起

来日青年會

会長藤原滋雄

副会長 谷垣六郎兵衛

会員名 四十八(年長順)



写97 繫徳維昭碑(来日觀音寺)

賛助者

来日村々中

觀音寺良亭

雲光寺玄龍

谷垣六郎衛門

城嶽猪之助

谷垣六郎兵衛

橋本辨治郎

谷垣善太郎

小幡 弥助

仲沢太郎兵衛

簸磯青年会

上山青年会

二見青年会

藤原市右衛門

谷垣与之助

寄砂勘左衛門

石材寄付者

青田 茂吉

石工 城崎町

青田 茂吉

「穀徳維昭」の碑にかいてあるような漢字の書体を篆家、（篆書）といい、石碑に篆字で書いた題字を篆額といふ。中国では、前七世紀頃に、すでに今日の漢字がおきたが、前二二二年、秦の始皇帝によつて字体の統一に着手し、それにより生れたものが、「小篆」である。碑の題字にいまでもよくみるものだ。この「篆」を簡略化したものを「隸書」といい、漢代紀二〇七以降に普及し、ついで「楷書」「行書」と発展した。

(4) 民間信仰と石造遺物

地蔵信仰 多くの石造遺物のうち、幾百年の星霜に、材質の弱いものは破損して形骸を残さぬものも多い。銘記も年月も不明なものが多い。民間信仰の証として、いまもなお人々に存在意義を認められている代表的

なものに、地蔵尊がある。

地蔵尊は、江戸時代の庶民信仰の象徴として大いに崇拝された。いまも信仰する人々が多い。地蔵は、御厨子の中に収まっている仏でない。それは、野の傍で雨にさらされ、風にあたつて立っている仏なのである。

民衆の中に定着した地蔵の意識は、左手に宝珠を持ち右手に錫杖をついて、どこにでもきて、庶民の苦しみを救い幸福をもたらしてくれる坊さんの姿であり、それは、あまねく民衆が地蔵に見た、もつともなじみの救済者のイメージであつた。

地蔵は、民衆の苦悩を癒やすことを専門業とする仏なのである。生者のみならず死者の苦悩をものぞく仏なのである。

かつて、江戸時代には子どもの死亡率が非常に高かつた。この罪なくして死んだ子供に対し、親はどんな気持だつたろうか、可愛相に、と涙を流しながらえらぬわが子のことをいつまでも思い出す。

政治の圧制・搾取で、その苦渋を最も深く身に受けた民衆の、その生活の苦しさの中で、親の無力や貧困のために死んだ数多くの子供があつた。とくに悲しい間引きによる死もあつた。野の傍に、また墓地の片すみに立つ、一つ一つの地蔵の中に、その悲嘆と痛恨の嗚咽や叫びが聞えてくるようだ。

地蔵崇拜は、民衆庶民の中に多く生れた。しかも、わが国固有の神の信仰を最もよく受けついだといわれる。その一つに、村の境にある地蔵は、「賽の神」と結び、悪霊が外部から侵入して来るのを防ぐ神としてその変化したものであるといわれる。

墓地入口にある六地蔵も、初めは死者の世界と生者の世界の境にあつて、死者の靈が蘇つてくるのを防ぐと

いう「賽の神」的意味を以つて立つてているのだといわれる。

いま一つ、地蔵が錫杖を持つて立つ形は、古くから日本にあつた遊行神と結びついたのではないかといわれる。祭礼の神輿の先ぶれの姿を見るように、日本の神は、巡り歩いて恩寵をもたらす神であった。この神の性格が地蔵にうけつがれる。いまでも、地蔵盆に石地蔵をもち廻つたり、遠くから町内に地蔵を持ち来つて、まつる風習がある。

峠の地蔵は、村人や旅人を病苦から守り、その道中の安全をも見守つてゐるようだ。

郷土城崎にも、多くの野の石仏とくに石の地蔵が散在してゐる。子安地蔵・子育て地蔵・延命地蔵・地堅め地蔵・勝軍地蔵・また津居山の鯖地蔵・塙地蔵・夜泣き地蔵、縛られ地蔵等々、人々の生活と密着して現世に生きている。

湯嶋「地蔵湯」の地蔵尊は、その伝説と人々の信仰の結集や、入湯の人々にも崇拜され、供花やお供物が絶えぬ。同じように樂々浦の「鼻かけ地蔵」も、その伝説とともに人口に膾灸かじきしてゐる。

湯嶋と竹野を結ぶ古来からの峠みち、いもぢもどし（鑄物師戻）峠はトンネルが通じたために廃道となつているが、草むした中に石地蔵が二体昔を語るように立つてゐる。

銘に、「寛政四年（一七九二）建立」とある。舟形光背つき石像である。

六 地 蔵
六地蔵は、村の名となる程、人々の信仰を集めている。六軀の石地蔵は、六道において人間の苦患を救うといい、村境・村の入口・辻・寺院・井戸等にあつて信仰されてゐる。
郷土における「六体地蔵」はつぎのとおり、造立刻字はほとんど不明である。

- ・薬師橋畔 ・愛宕山登り口
- ・極楽寺山門わき ・弁天山麓
- ・桃嶋墓地 ・今津墓地入口
- ・来日觀音寺境内
- ・口来日墓地入口

- ・結の船戸（現在は移転し、新道に沿い三石岩の下）
- ・結の墓地入口 ・戸嶋揖戸

・飯谷香積寺山門

「南無地蔵菩薩」の石像が所々にある。

一、極楽寺山門にあるものは、高さ 二五〇センである。

讃州高松住

西垣惣左衛門 寄附

明和六年（一七六九）五月

二、飯谷一樂々浦境の松本石材店横にあるものにはつぎのようにみえる。

元禄十二年（一六九八）六月

宗 空

三、福泉寺山門 二基



写98 薬師橋畔の六地蔵

五輪型 南無地藏大菩薩

正徳四年（一七一四）

舟形地藏尊

享保十一年（一七二六）

江戸時代、温泉寺から木版刷りで出されている『觀世音三十三ヶ所廻り、地藏尊六十六ヶ所廻り』によれば、但馬六十六カ所の地堅め地藏のうち城崎町内分はつきの通りだ。

▽五十四番 滝 森津薬師庵

▽五十五番 来日村口

▽五十六番 温泉寺塔の道わき

▽五十七番 津居山 舟渡し

▽五十八番 樂々浦 村おく

▽五十九番 結 谷川沿い 堂

なお第亜番は、大乗寺より七日市村の下

五丁。五十五番、来日村口にある地藏御詠

歌に、「暮るる日を 何と思ふぞ 人ごと
に めいどのつかひ たつとしらずや」と
書かれている額と並び、「但馬國城崎郡來



写99 来日にある但馬六十六地蔵の内
五十五番

日郵、地藏菩薩六十六ヶ所ノ内五十五番」とある。

地藏堂は来日村の口、字「道々」にあり、堂内に凝灰岩質で陽刻の地藏が安置されている（高さ 一六〇セン、巾四四セン、奥三〇セン）。

万靈供養塔 供養塔はおよそつぎのように分布している。

温泉寺多宝塔 寛文八年（一六六八）

石段下 「御影供養講衆」建立（150×40×20）

桃嶋坂 延宝二年（一六七四）

「三界万靈等」（66×40×20）

今津墓地 寛文十二年（一六七二）

「女人講」建立（150×40×20）

南無阿彌陀仏併起

安永六年（一七七七）（90×40×30）

（地藏堂）

桃嶋墓地 文化七年（一八一〇）

土岐氏、舟屋庄右衛門

（150×40×20）

飯谷香積寺 文政元年（一八一八）



写100 萬靈供養塔（温泉寺）

願主・井瀬太郎太夫 (90×40×30)

来日観音寺境内

薬師橋畔

奈佐橋畔

寛政十二年（一八〇〇）

甲ヶ鼻 願主・橋本伊左衛門（豊岡）

極楽寺墓地

寛政五年（一七九三）

江戸時代中期以降、個人の信仰の証として建立されたもの、あるいは念佛講など遍歴僧などに誘発されたものが多い。

名号石とこの文字の下に「三界萬靈」と記するものが多い。「南無阿弥陀仏」の六字名号を記して、「名号石」とも呼ばれている。名号の下に蓮座を刻み、名号自身が阿弥陀仏そのものを示している。

来日堂々辻に南面してある、郷土最古のもので、寛永十六年（一六三九）、三代家光のころ。

寛永十六年

弥陀の種子 南無大師遍照金剛

己卯三月二十一日

高さ 一メル、横巾 一二五セン

奥行 一〇〇二〇セン

裏面に、奉供養 誦者 又左衛門

五郎右衛門

弥左衛門

○郷土における「南無阿弥陀仏（名号石）」

磯力谷墓地口 寛文十二年（一六七二）

自然石

今津墓地口 寛文十二年 自然石

「三界万靈」 女中同行二十四人

結の辻堂 延宝□年（一六七三）代

結の「三石岩」 元文五年（一七四〇）

上山字けごや 元禄二年（一六八九）

湯嶋字荒船 享保三年（一七一八）

極楽寺山門 文化十三年（一八一六）

来日觀音寺 元禄二年（一六八九）

磯力谷墓地 無縁塔

○郷土における「南無妙法蓮華經」題目石

来日 立屋トンネル横 元禄七年、緑色凝灰岩にマガイ仏彫刻

豊岡立正寺・日現上人の筆頭文字



写101 今津墓地口の名号石（自然石）

本住寺山門

寛保元年四月二十八日材質粗面岩（152×48×43 台方45）

中の町より移す。江戸時代は赤石屋角に実在し、のち現在地に移す。

来日、道々

結、三石石

昭和五十四年、道路工事により破損。年代元禄か？

自然石、「一天四海皆帰妙法」

小島道君石

明治四十五年建立。大阪法華護持人、田中氏

この地方に出現したのは、江戸時代に入つてからである。このような名号石が個人の菩提碑とされている例は、現代にいたるまで多く数えられる。

浄土真宗寺院の関連が、全江戸時代を通して
みられる。

「名号石」が頻出する時代（寛文～元禄）は、
寺請制度の完成期である。庶民の経済的余力が、
中期の六体地蔵盛行や寺檀家制度の確立の際、
従来の祖靈崇拜の習俗に結びついて、この時期
に庶民の仏教活動が大いに普及する。

三界万靈塔（等）の文字を刻んでいるのは、
衆生の輪廻する世界、三界（欲界・色界・無色



写102 三界萬靈供養塔（飯谷香積寺）

界)に満ちる万靈の供養塔で、十七世紀半ごろ出現し、寛文(一六六二)～元禄(一六八八)期にピーカに達したという。

念佛講のほか僧・行者と思われる人々による建立が多いが、禅宗系統との関係がとくに濃厚に認められる。「名号石」や「万靈塔碑」は、近世庶民仏教の典型としてのシンボルであつたといえる。

わが国全体を見ても、他の墓碑を除くと、五輪塔ほど多く分布するものはないといわれる。

江戸時代にかけて、一石五輪塔の普及がめざましく、無在銘が多いが、五輪塔は宇宙の生成要素たる“地・水・火・風・空”を現し、密教思想に基づき、宇宙の本源である「大日如来」を象徴するという。

城崎の墓地を一巡すると、小さい五輪も無数にあり、他に陽刻五輪塔・梵字五輪・板碑五輪陽刻・石龕型比翼塔陽刻・石龕型単立五輪塔陽刻等々がある。

郷土の五輪塔分布は、およそつきのようになる。

- 桃島池子ども広場 一
- 温泉寺多宝塔下 二
- 中性院歴代墓地 五
- 三宅家 一(石龕塔) • 鮎江家 一
- 日生下家 二 • 武谷家 二
- 西村家 一 • 秦家 五(一石五輪塔)
- 黒崎家 一 • 橋本家 二(ひのそ)



写103 石龕型五輪塔(三宅家)

・染々浦深原 五（一石五輪塔）

・香積寺 二・福泉寺 二（陽刻五輪）

・長沢家 二（飯谷）

宝筐印塔 宝筐印塔は中国や朝鮮にないわが国獨得なもので、本質は供養塔で法華經舍利、宝筐印陀羅尼經と供養碑を収めて供養するものである。

温泉寺のものは、南北朝時代および鎌倉後期からのこととされ、国の重要文化財に指定されている。県指定のものは、桃島池畔と弁天山にあり、町指定は温泉寺多宝塔下に二箇ある。

宝筐印塔の分布はつぎのようになる

極楽寺山門 明和八年（一七七二）

西村六左衛門之茂建立

「大乘妙典拾回石上造塔供養」

桃島池畔 応安五年（一三七二）十月二十

七日 高さ一四四セン、（南北朝時代）

弁天山 応安六年（一三七三）七月十日

高さ一五七セン、（越中次郎兵衛塚）



写104 温泉寺五輪塔

極樂寺茶室 相輪笠破損
桃島字上峰 破損不完全

温泉寺多宝塔下 高さ二一四センチ、花崗岩質 昭和三十六年三月、国指定（鎌倉時代）

同所 願主・土岐淨運 元禄□□年 自然石

同所 淨運 寛政八年（一七九六）

○その他供養碑にはつぎのものがある。

極樂寺山門 弘法大師石像 三木屋

温泉寺参道 后 経 巨堂了雲居士 安政二年（一八五五）

愛宕山道 金剛經石書塔 西村清左衛門

上山辻堂 二十三夜塔 安政二年（一八五五）

福泉寺 奉唱二十三夜塔 当邑中井

一字百拜 安政元年（一八五四）

桃島家ノ上 奉書写 一字一石 波多忠右衛門 建立 理趣經二一卷 文化十四年（一八一七）

雲光寺境内 当山中興塔 元禄六年（一六九三）

法華塚 孝子三宅世繼建立 文化五年（一八〇八） 元藥師堂前に建立

桃島家ノ上 法華塚 破 損 享保二十年（一七三五）

弁天山麓 板碑 豊岡 舟屋利兵衛 延宝八年（一六八〇）

薬師堂横 層塔二基

福泉寺

無縁塔

隆苗、徳兵衛

（岩本徳兵衛）

明治十六年亡靈三百余

温泉寺

龜趺型

道智上人墓碑

撰文糸鳳存

明和八年（一七七一）

薬師境内十三堂

十三石仏

豊岡 紹屋五兵衛

（阿弥陀堂）

父母追善 貞享三年（一六八六）

独鉛水

線刻・弘法大師像

施主・友七（浜田屋友七）

文化十一年（一八一四）

札所石

四所神社 法印

実音 文化十一年

薬師橋・温泉寺山門・温泉寺鐘楼・多宝塔

極楽寺の茶堂

宝筐印塔型

半僧半俗の人達 文政三年（一八二〇）

為山中栄昌 金剛經、晋門経

奉誦唱日課 般若心經

本住寺の墓地

奉唱満御題目 二千部成就 唯心院妙岸日 到信女 寛文二年（一六六二）

墓 石

近年、墓地公園とか靈園とかいう共同墓地が一種の流行となつてゐる。人間の生活様式の大きな変化に応じたものだ。その墓石は立派で、型式も斬新で明るいものが多い。

とくに第二次世界大戦以降、戦死者や、戦災地での犠牲者が数多く出たので、墓石・墓地もまた変つたものがみられるようである。

一般庶民が死者に墓石を置くような習慣は、江戸時代になつてからであるといわれる。

それ以前は、墓地に印を設けるのに、手ごろな石を一つのせて置くか樹を植えるとかする程度のものであり、またそれすらしないで埋葬箇所が不明になることも多かつた。石碑は墓地の印というよりも、むしろ供養塔に発していることが考えられる。

卒塔婆となり、板碑となり、今日一般にみるような方柱墓石にまでなった。印塔型・五輪型・宝筐印型・○家累代之墓などはこの供養塔によるとみてよい。

なお庶民の墓標に文字を刻んだ石を立てるることは、江戸時代中期以降の流行であり、以前は石を用いるとしても小さな自然石にすぎなかつた。この小さい石を油石・枕石といつた。

天保二年（一八三二）、十一代徳川家斉は、「百姓町人の葬式、石碑を制限し、院号居士号の戒名を禁ず」との布令を出して、万事贅沢となつていく庶民の生活をいましめている。江戸時代の三大改革といわれる。

八代吉宗・十代家治の代の松平定信、十二代家慶の代の水野忠邦など、一貫して庶民の奢侈を戒しめ儉約令を屢々発したが、富を得て一般的に生活も安定すると、墓石も次第に立派なものになつていった。

いま、湯嶋村役階層の墓碑の年代を調べても、江戸初期（寛永—元禄、一六二四—一六八八）の年代銘のある墓石は極めてすくない。

庶民は、江戸初期まで「墓石制限令」により、墓をもつことは許されなかつた。実際に、民衆（村役層を除いて）が墓をもてるようになつたのは、中期以降である。そして明治時代になつて、百花繚乱の觀を呈してきた。江戸中期までは貧しさのため、墓どころではなかつた。河原石・自然石を置くだけで、為政者に抵抗して石仏に仮の名を刻んで墓としたり、道祖神や道しるべの石仏の中に潜ませたりした。

このころ、石塔をたてて墓のありかとすることのできるのは、一握りの地主階層にすぎなかつた。

郷土における「墓石しらべ」によれば、江戸も中期・末期にいたるに従い、その数を増しましたその形状も大きく立派なものになつたことがわかる。

旧内川村および桃島・今津の農村部についても、江戸中期から幕末にかけ飛躍的に増加し社会経済・文化の発展に順応してきていることがうかがえる。

町石・道しるべ　寺院への参道にある「町石」は、参詣する人々が頼りとする「道しるべ」であるが、その

形状に信仰が表現され思いやりが現れている。しかし、その形状も様々であつて、単に角柱・板状・自然石に文字を記しているだけでなく、神仏を形どるもの、とくに地蔵尊像が多い。

地蔵は現世の苦痛を救う菩薩であり、賽の神と習合して路傍に立つて、旅人の安全を守つてゐる。

また、「道しるべ」は仮名で刻んでいるものが多い。文字の読みぬ旅人にもわかるように書いてあることに、それを設けた当時の人々の心がうかがえる。

町域のみならず、但馬・丹後・丹波には「ゆしま」の字が各所に見えることから、江戸時代「但馬の湯嶋」が、いかに人々の印象が深かつたかが想像できるとともに、湯嶋の繁昌ぶりがわかる。

一、薬師橋の畔の五輪型石柱に、「本堂へ四丁」とある。

「温泉寺願主 祐全」

「貞享三年（一六八六）」

温泉寺本堂より一、二、三、四本の「町石」が椎の老樹の参道に立つてゐる。

二、雲光寺の山門あとに、「十二丁」の石があり、地蔵尊である。

「施主 当村□村 女人講中」

「雲光寺現住 丹丘記」

来日の堂から始まって十二番目にあたる。

三、今津村の南の端に南無阿弥陀仏の石像が鉄道わきの山麓に立っている。

みぎ やまみち

ひだり とよおかみち

四、宇日谷を、桃嶋川に沿って遡ると、小さい地

蔵堂があつて、傍に

左 山みち
右 ういみち

の道しるべがある。

五、竹野への道を、大谿川をのぼり「来日山道五・三キロ」の地点の分岐点にあるもの。

右 竹野はまみち

南無妙法蓮華經 みしまや要助

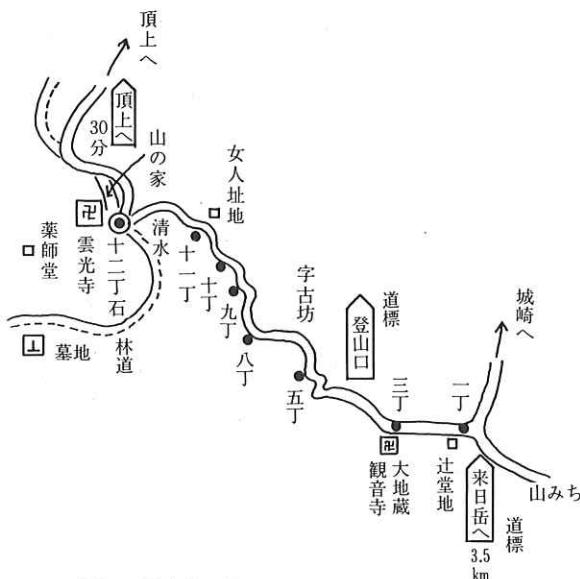


図31 雲光寺の町石

左 あし谷みち

これは、古い竹野道を登り途中にあったものが洪水で東谷に落ちて現在地に移されたものだ。

昔の竹野みちを往来するときは、この道しるべで旅人はさぞ迷うことであろう。

『豊岡市の石像遺物』（昭和五十六年十二月一日発行）によれば、野上・金剛寺口に舟形光背地蔵がある。

右ハ こんかう寺道

左ハ ゆしま道

安永七年（一七七八）

七月十四日

二、庄、宮井口に五錐角柱地蔵尊がある。

すぐとよおかみち

左 ゆしま

三、辻、船谷境の舟型光背地蔵がある。

右 ゆしま

左 たかの

四、伊賀谷奥に自然石があり、

右 ゆしま

左 やま



写105 道しるべ
みぎやまみち
ひだりとよおかみち



写106 水明楼跡（今津）

五、柄江、福田口に板碑地蔵、

右 とよおか

左 ゆしま

などが散見される。

(5) 柴野栗山と水明楼

三本松の風致

湯嶋街道を上り下りする旅人も、円山川を上下する船人も、さては津居山入津の廻船業者も、三本松はそれぞれ灯台や道しるべのように憶い出の風致として心に残る、今津の端の巨樹であつた。

幾星霜のときの流れとともに、此の老松は、交通上の妨げとされて昭和四十年代末に伐りとられた。川端の道沿いにあつた「石ぶみ」二基も移されて、いまは東山公園の登り道にあつて、ときの移りとともに人々の憶い出から遠ざかろうとしている。

「三本松」とは、単に老松のみを呼ぶ名ではない。郷土に生活し、かつて郷土に暮らした人々の心に残る映像で、なつかしい憶い出の場所である。

あるときは子ども達の水泳の場所であり、また貨客船の舟着場となつて、渡し場を往来する人達の湯嶋への分岐点として、狐狸の出る伝説をも生んで、昔を語る故老につきぬ話題をあたえる名所であった。